派遣のヒーロー時給3600円

麻技准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

派遣のヒーロー時給3600円

【Nコード】

N4931L

【作者名】

麻技准

【あらすじ】

派遣のヒーロー時給5800円の続編です。

俺はヴァイラス遊星から地球に飛来し、ヒーロー派遣会社『テラエクス』に勤めている派遣ヒーローだ。

ヴァイラス遊星はだいたい、ウルトラの星と地球の間にある星で、宇宙のド田舎。

俺達ヴァイラス星人は地球人に似ていたが、ヴァイラス遊星では数万年前から内乱があり、細菌兵器ばかり使っていたために突然変異が起こり、全身が緑色になり、毛が抜けた。

その姿は、緑色のブルーマンにしか見えない。

地球では、スーツを着ている、三十代中盤の男性に変装しているが。

「しっかし… 金ねえなあ」

PM9:54。

五畳風呂なし、共同トイレ付きのアパートの二階で、コタツにあたりながら、ジャージ姿の俺はテレビを見ていた。

アナログと出ている、もうすぐ見れなくなる(2010年5月現在)古いテレビだ。

暗いニュース番組が、日本の不況を延々と解説していた。

そして、色々と物騒な事件が、報道されていた。

「今日も平和だったな、俺の周りは」

産まれたての赤ちゃんが放置されて死んだ？

ババアが孤独死した？

知らね。

知らねったら、知らね。

俺はもう、そんなこと、知らない。

今日も俺はラブホテルのバイトをしていた。

クソムシどもがやった後の始末をするのが、主な仕事だ。

時給がけっこういいけど、このままでいいのかよ、俺。派遣ヒーローは時間給であるが、一日にそう何度も事件が無く、発生しても市内には既に数百の派遣ヒーローがいるために、出番が無いのである。

因みに、時給3600円。

恐るべきことに、危険手当では常に出ず、怪我をした際に医療費が二割負担となる。

常に危険と隣り合わせの実情の割には、あんまりな給与である。殆どの事件が一時間で終わるため（というか、それくらいで終わらない危険な事件は派遣に割り当てられない）、月の稼ぎがピンからキリまでであり、生活が不安定だ。

母星に帰る資金を貯蓄して金の工面に苦勞する奴もいる。

だが、俺はもう星に帰ることは諦めた。

この星で、俺はゴミクズのように死んでいくんだ… どうせ。

九鳥山政権になってマニフェストである『派遣ヒーロー宇宙人の母星帰還資金の助成制度』は資金難により、全く実現しなかった。

俺、一票入れたのに、裏切られた。

政治家はマジでゴミクズだ。

マジで、俺達を切り捨てていくつもりだ。

クソが。

「もう… ヒーローやめようか、クソムシ守るのも、嫌だし。疲れるし」

派遣ヒーローは、一般人の通報が警察にあつた時、犯罪を犯して

いる存在が戦闘員や怪人であった場合、警察の要請で危険を排除する。

それが主な仕事だ。

『緊急出動、緊急出動、BN145は現場に出動せよ』

俺の携帯に、緊急通信が入る。

いつもの機械的な音声だ。

BN145とは、俺の識別番号である。

派遣のヒーローはかなりの数がいるため、識別番号でしか呼ばれない。

まあ、名乗ろうとしても、バナイの商標登録に引っかかってしまっただけだ…

「あーめんどくせー」

腕のブレスレットがけたたましく鳴り、俺は一瞬にして戦闘形態へと変身する。

というか、星人の姿へ戻っただけであるが…

目に当たる部分の無い三角形の形をした頭部、あとは緑色の全身。とても簡単なデザインであった。

この姿で死んだら、デザインの確実に悪の怪人として焼却処分されるだろうな。

まあ、どうでもいいけど。

俺は、もう嫌だ。

今日で、死んでもいいや。

どうせ、誰も悲しまないだろうし。

でもま、悪い奴を正義の名の下にブツ殺すのは、悪くない。

つつか、楽しい。

特に、まれにいる自分よりはるかに弱い奴をなぶるのは。

はいはい、残虐残虐、でもま、行きますかリンチに。

さあさあさあ、仕事の時間だ！

誰を殺そう?!
つつか、誰でもいいし…

2

俺は繁華街の裏路地で、風呂敷を右手に持った赤い全身タイツの戦闘員を追いかけていた。

情報によると、一人しか店員のいないコンビニに強盗に入り、そいつを殺して資金を持って逃走しているらしい。

つつか、深夜なら二人雇えよコンビニ。

マジで使えねえなオイ。

深夜バイト君も、頑張って深夜手当で欲しくて働いて殺されてりや世話ないな。

「キキーツ!!」

戦闘員が風呂敷を放って振り返り、ナイフで俺を突き刺す。

突き刺すが、俺には効果が無い。

ヴァイラス星人には物理的ダメージは殆ど効かない、殆ど、だ。

「死ね!!死ね!!死んでしまえ!!」

今のは俺の台詞だ。

そして、その叫びと共に俺の鉄拳が炸裂、せず戦闘員に受け止められる。

「あーうぜー!!受け止めてんじゃねーよ!!」

決定打が足りないので、日頃の怒りを込めて何度でもぶん殴る。

殴り合わないと、戦闘員を倒せない。

だから、いくら体をゲル化出来ても、ダメージが蓄積する。

だから蓄積したぶんは、こいつで存分に発散させてもらおう。

ヴァイラスという故郷がある。

しかし、こいつは俺を見下しやがった。

許せねえ。

俺の中で、何かがふっ切れた。

「ブツ殺すー!!」

俺はヒーロー様に殴りかかった。

「はあ… だからヒーローモドキは困る」

しかし、ヒーローは呆れたように肩をすくめ、俺の拳を軽々と受け止めた。

そして、また俺をバカにした。

俺の気持ちも知らないで。

こんな理不尽な世界で歪んだ俺の気持ちなんか、知らないで。

「ああっ?てめえ… 俺が最初からこうだったと思うなよ!?俺をこうさせたのはてめえらだ… この世界が悪いんだ!!」

俺は密着状態のまま、蹴りを繰り返す。

しかし、効かない。

悔しいが、ヒーロー様には、俺の攻撃が効かない!

「全部世の中のせいにするな、お前が悪い。今のお前は、あるべき結果だ。俺も最初からこうだったわけじゃない」

ヒーロー様が俺に言う。

まるで、教師のように。

まるで、俺が全部悪いものであるかのように。

俺は、最初から悪かったわけじゃないのに。

「うるせえ… ふざけんなー!!」

俺は叫んだ。

そして、それに呼応するかのように、深夜の闇の中から紫色の霧が発生し、俺を包み込んだ。

『待て… その憎しみの塊よ』

そして霧の中から何かが呟く。

怒る俺にも分かった、この声の主が、巨大な悪意そのものであることが。

「なっ！？ 貴様は！？」

ヒーロー様は驚きを隠せず叫び、紫色の霧に向けて腕からビームを放つ。

しかし、俺の周囲の紫色の霧はそんな攻撃をもともしない。当たり前だ。

この霧を操る巨大な力を、俺は知っていた。

というか、そいつを知らない奴は、とりあえずヒーローと名のつく仕事をしている奴の中にいなかった。

かつて宇宙の大半を手に入れていた戦闘民族ギゾンド。

その一族の邪悪なる神、ン・ゴムダ・ゴダであった。

『ふふふ見所のある若者をスカウトするのは大切なのでな、貴様の力、我らギゾンド一族のために存分に使うがよい』

かつて宇宙を震撼させた恐怖の神が、俺の怒りに呼応し、加勢してくれるというのか。

ありがたい。

これで俺は戦える。

『人間を殺せ。奴ら是我らと同じ邪悪な存在。だが、奴らは正義を名乗る。薄汚い生き物だ』

ああ、やってやる。

これで、歪んだ世界を全てブツ壊せる。

コレでもっと殺せる。

許さねえ。

許さねえ。

『ギギアアアウオ!!』

そして、紫色の霧の中から出た俺は生まれ変わった。

あるべき姿に。

全身は茶色い殻で覆われ、頭は、無数の鋭い牙がハリネズミのように生えており、目や口にあたる部分が見当たらない。

そして、下半身に黒いフンドシを着ている。

そんな形の、いかにも強そうな怪人が、ビルの窓に映っていた。

その怪人が、新しい命を得た俺だった

『俺は殺戮のカリスマ!!グ・ヴァトル・ガ!!』

名乗りと共に、とりあえず眼前のヒーロー様の両腕を切断した。

「うがあああつ!?!」

ヒーロー様はうめき声をあげた。

まるで、蝶々の羽をむしるような簡単さだ。

愉快過ぎる。

『もう一度、俺の役職を言ってみる』

「ひいひいっ?!」

両腕を失い、後ろに倒れたヒーロー様の体を蹴り飛ばし、俺は執拗に攻撃を繰り返す。

やはり楽しい。

「は…… は、派手」

違うので、俺は思い切りヒーロー様の頭を踏み抜いた。

「他愛ない。これが俺のなりたかったものなのか… 脆く、はかなく、弱い」

返り血を浴び、俺は嘆いた。

こんなものになりたかったのか。

こんな最後を迎えるために、俺は頑張ってきたのか。

なら、今のほうがマシだ。

いや、マシなんてものじゃない。

いい。

この力は、いい。

「それに比べて、この力はどうか… たぎるぞ、そして他人が悲し

むほどに、快感だ!!」

もっと泣け。

もっと苦しめ。

俺を喜ばせるために。

所詮、人間はそれだけの存在だ。

自分のために、他の存在など、いくらでも犠牲に出来る。

人間と俺は、同じだ。

生物の、正しい在り方なのだ

「……」

都会の裏路地で、新しい誕生を迎えた俺に対し、新たなヒーローが現れた。

クワガタ虫のような触覚と丸い大きな複眼。
赤い胴体、黒い脚。金色のツノと装飾品。

『… 貴様も、守るために戦うのか？』

俺は問うた。

貴様も、かつての俺なのか、と。

あのくだらない、俺なのか、と。

「みんなの笑顔を守るためなら、俺は 戦う!」

クワガタ虫のヒーローの脚に電撃が走る。

間違いない、こいつは本場の、そしてその中でも強力な力をもったヒーローだ。

いいぞ。

今なら殺せる気がした。

いや、殺すだけではもったいない。

絶望を植え付け、鬨り殺す。

殺す。

殺す。

殺す。

殺す。

『いいだろう、俺は全力で貴様を殺す』

俺は殺戮のカリスマと化した、元派遣ヒーロー。

もう、太陽の光の恩恵を受けることのない、邪悪な存在。

弱い人間をなぶり殺すことが快楽である怪人。

さあ、誰か俺を止めて見せる

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931/>

派遣のヒーロー時給3600円

2010年10月8日15時01分発行